

平和を願う

④

素顔の予科練生
後世に

陸上自衛隊土浦駐屯地の隣にある「予科練平和記念館」。
地元・阿見町が「予科練の全体像を後世に」と3年前に開設した。

戦争に特化した施設を自治体が造ることへの批判を懸念する声もあったが、当時、町長だった川田弘二さん(77)が「ここで予科練教育が行われた事実を正確に提示し、平和を考えてもらえれば」と決断した。

館内は「入隊」「訓練」「飛翔」など七つのテーマの展示室に分かれ、各部屋の入り口に、予科練生の率直な思いを表した短い文言を書き記してある。

「僕は何も形見を残したくな

いのです。10年も20年もすぎてから形見を見てお母さんを泣かせるからです」

展示を締めくくる「特攻」の部屋には、19歳の特攻隊員が、

最後の帰省で母に別れを告げた際の言葉を選んだ。

「どんな少年たちだったか知ってもらうには、家族に残した言葉や手紙を見てもらうのが一



「予科練生の手紙には、今の若者と変わらない心情がつづられています」と話す渡辺さん(阿見町の予科練平和記念館で)

番」。開設準備から関わり、先月まで同館の学芸員だった町生涯学習課の渡辺裕美子さん(37)はこう考えた。

「明日は外出です。まんじゅう食って汁粉を食って、大福食って、芋食って…」

「交流」と名づけた部屋には、阿見や土浦の街に外出するのを楽しみにする予科練生の無邪気な手紙の文言を記した。

渡辺さんは、県立歴史館(水戸市)に勤めていた2005年、上司に打診され、学芸員を引き受けた。町が保管していた資料を整理するうち、予科練生の真の姿が見えてきた。中でも驚いたのは手紙だ。軍国少年ばかり

だろうと思っていたら、「土浦より故郷の女の子のほうが清楚でかわいい」とつぶつぶっていたり、映画や女優、ヒット曲の話題に触れていたりと、今と変わらな

い若者の心情があふれていた。遺族の手元にあるこうした資料も、代が替わると処分されるかもしれない。「今のうちに残しておかなければ」。予科練関係者の親睦団体の会報などで提供を呼びかけ、保管者がいると聞くと、遠方にも足を運んだ。集めた手紙や日記のうち8人の126点を、来館者が手に取って読めるよう5冊の本にまとめ、「心情」の部屋に置いた。

予科練出身者や遺族、友人らと話してみると、教科書でしか知らなかった歴史の中に自分もいる気がした。「歴史は言葉で伝えられる」。来館者にも、あの時代を現実として心に刻んでもらえればと願っている。

「みんな生活は不規律な

自堕落な生活なり」と

軍人の身はつらいです

女を見ても負直ぐして

過らねばなりません

お母さん、妹よ、おやすみな